

青少年の

健やかな成長は

県民すべての願い

カルチャーセンターで

青少年健全育成県民大会を開催

平成三年度青少年健全育成県民大会が、十一月十四日カルチャーセンターで開催されました。この大会は県、市、県警本部などが主催し、青少年の健全育成を願い、多様化する青少年問題について研究するもの。県内各地の青少年健全育成関係者や市内の中学生など約一千四百人が出席しました。

大会では、青少年健全育成に功績のあった功労者十六人と二団体を表彰。その後、少年の主張県大会の優秀者三人の発表がありました。また、新潟大学医療技術短期大学教授の眞壁伍郎氏が「大きな森も小さな芽から」と題し講演。物質文化中心の生き方から心の文化を充実した生き方への転換を、中学生にも分か

りやすく訴えました。大会は最後に大会宣言を提案。市青少年育成指導委員会の藤宮平一会長が朗読し、参加者全員の手拍りで採択しました。

大会で表彰を受けた本市の関係者は次のとおりです。

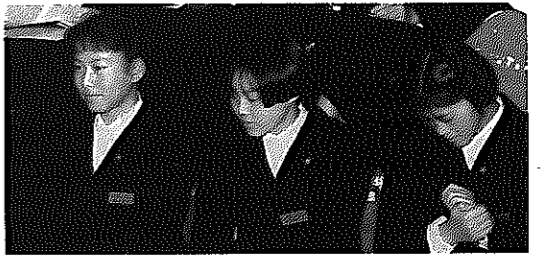
【青少年健全育成功労者】

知野俊巳さん（上新田・七十四歳）、本間大次郎さん（上笠巻・六十五歳）、滝沢貞一さん（下町乙・五十七歳）

【青少年健全育成功労団体】

白根市青少年育成指導委員会

なお、少年の主張県大会最優秀賞で全国大会総務庁長官賞の皆川辰男君（弥彦中三年）の発表文は次のページに掲載しました。



▼アトラクションで白根第一中学校吹奏楽部が演奏



大会宣言

いつの時代においても青少年が健やかに成長することは私たち県民のすべての願いです。高齢化・情報化・国際化の進む中であって次代を担う青少年が自らの置かれた環境において、ゆとりと強い意志を持って行動できるように自主性・創造性を培い、国際的視野に立ち、健康と思いやりで富んだ活力ある青少年として成長することを願い、ここに次のことを宣言します。

- 一 私たちは、家庭におけるしつけの重要性を認識し、明るい家庭づくりを進めます。
- 二 私たちは、地域における連帯意識の醸成につとめ、地域ぐるみの青少年健全育成活動をすすめます。
- 三 私たちは、青少年が誘惑に負けない強い心と信念を養い、併せて自らの役割を自覚し、すすんで社会参加できるようにその条件整備をすすめます。
- 四 私たちは、青少年を取り巻く有害環境の浄化運動をすすめる、非行防止活動を積極的に推進します。
- 五 私たちは、国際化社会に対応できる青少年の育成をめざし、広く世界の青少年と交流する機会と場の提供につとめます。

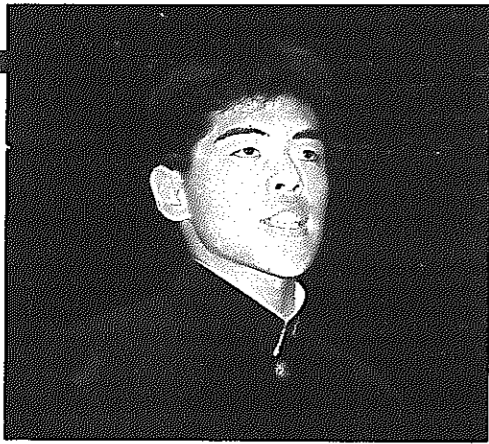
平成三年十一月十四日
青少年健全育成県民大会

少年の主張 県大会最優秀賞
全国大会 総務庁長官賞

長男の宿命から

弥彦中学校3年 皆川辰男

※原文のまま掲載。見出しは広報担当で入れました。



父の病気に茫然とする私 必死に働く母

「辰男君、君の進路に対する考えは？」その時は私はずぐに答えることができませんでした。二年前のある日の事です。いつものごとく部活を終え家に帰ると、なにかはりつめたような雰囲気在家中に漂っていました。その夜の事です。父は私に、「辰男、おれは、病気になるかもしれないやあ。腸の所を何センチか手術するんだが……成功しても何年かは仕事ができないんだあ。」

清掃登山の日 田植えを手伝ってくれと母が

あれから二年、父の病気が回復にむかっています。何もできなかつた茫然としていた情けない私も家族のためにやれることはなんでもやってきました。そして今年の五月七日、学校行事である弥彦山清掃登山の朝の事です。その朝は快晴です。母に朝起きてすぐ頼まれました。「辰男、申しわけないけれど今日一日学校を休んで田植えを手伝ってくれないか、おわらないのは家だけなんだ。学校へはおれが電話するから。」

父の言葉に私はただ茫然としていました。ほかに何かかいていたようですが、私の耳には聞こえませんでした。農業という家業の我が家にはまさに大きな大黒柱であった働き手の父をうしない、数日間途方にくれていました。しかし、悩んでばかりはいられません。他の家より三倍以上ある我が家の水田をなんとかしなければと、父が病気になるってからのというものは必死に働いていました。

はありませんでした。さすがの私もこの時ばかりは、「なぜおれだけがこんな事をしなきゃならないんだ。友達はみんな登山をしているのにおれだけが。」しかし、この母の頼みをこなすことは、私にはできませんでした。なぜならこの家で働けるのは私と年老いた母、そしてまだ油断がゆるぎない父だけだったからです。何とか学校を休み田植えを手伝ってみたいものの「おれだけが。」という気持ちには抜けませんでした。登山をおえた仲間達を見るたびに私は車の影にかくれてしまいました。かくれる必要はないのですが、さずかしさが体をあつくさせ、そ

長男としての道を選び進んでゆきたい

私は物心ついた時から「辰男、お前は長男だよ。一人しかいない跡取りだ。」と言われてきました。そして家族全員、まるで私の成長が生きがいのように今まで育ててくれました。私が大きくなるにつれてその家族の思いはより一層強くなっていくのを感じます。

今、私は中学三年生。すでに自分の将来を考えていなくてはなりません。進路の相談をもちかけると父や母は決まって「自分の好きな道を進みなさい。」と言いますが、この言葉がうそであることは私が一番よく分かっています。私に農業を今すぐくつてくれというのが父母の本心です。これがかねる事が両親を安心させる唯一の方法であることも分かっています。しかしそれは私の気持ちがゆるぎません。私の希望、それは高校へ進学し高校生活三年間の中で私の人生に対する考え方をしっかりと学びとった上でこれからの

「辰男、おまえがもう少し大きかったらねえ。」と言います。私にどうしろというのでしょうか。早く大人になれるのだらたらとつくになつていきます。この気持ちを、いらだちと言うのでしょうか。

そんな時農業高校体験入学のことが掲示され体験入学を先生に申し込んでみました。するとなぜか気持ちが落ちついたような気がしました。自分は進みたい道に進めない、だれにでもゆるぎされている事が自分にはゆるぎされていない。今まで長男の宿命だとか自分の運命だとか思い悩みあきらめていました。ですが農業高校体験入学をきっかけとして農業をやるという前向きな気持ちになつているのかもしれない。今から三年後、私はいったい何をしているのでしょうか。それが見えているわけではありませんが、これからは長男としての道を選び、その道をまっすぐに突き進んでゆきたい。そう考えています。